

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月27日現在

機関番号：84604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：25871246

研究課題名(和文)近世庭園の様式と地域性に関する基礎的研究 - 重森編年への検証として

研究課題名(英文)A basic study on the style and regionality of the garden in the early modern period-as a verification to the study of Shigemori

研究代表者

高橋 知奈津 (TAKAHASHI, Chinatsu)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・文化遺産部・研究員

研究者番号：00516601

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：重森三玲の代表的著作である『日本庭園史図鑑』(1936-1939)および『日本庭園史大系』(1971-1976)における記載から、重森が庭園の造営年代の根拠を庭園様式に求める際の、様式的特徴について、江戸時代の庭園を対象に、その記載内容を抜粋、分析をおこなった。結果、重森は、池の形状を中心とする地割や、三尊石組や滝石組、護岸石組等の石組の力強さ、植栽における刈込あり方について、各時期の「典型的」な特徴を挙げていることがわかった。一方、個別庭園の年代鑑別においては、石組にみられる特徴が、地割にみられる特徴に優先するかたちで造営年代を遡らせる傾向にあるという仮説が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世の中小規模の庭園は全国に展開し、国あるいは都道府県・市町村により名勝指定がなされているものもある。特に文化財数の少ない地域では、これらは地域の中心的な文化財として、重要な観光資源ともなっている。しかしながら、重森らの調査以降、学術的な研究が十分に蓄積されていない庭園も多い。本研究は、重森の調査研究成果を、現在に十分に生かすとともに、現在の庭園史研究の方法論に則した学術的な検証をおこなっていくための基礎的な研究である。

研究成果の概要(英文)：From the descriptions in "Nihon teien-shi zukan" (1936-1939) and "Nihon teien-shi taikei" (1971-1976), which are representative works of Shigemori Mirei, Shigemori seeks the foundation of the garden construction age in the garden style. About the stylistic feature of the occasion, I extracted the contents of the description for the garden of the Edo period and analyzed it. As a result, Shigemori has "typical" characteristics of each period about the ground form mainly in the shape of the pond, the strength of stone groups such as Sanson stone group, waterfall stone group, revetment stone group, etc., cutting method in planting. It was understood that I mentioned. On the other hand, in the age identification of individual gardens, it was hypothesized that the characteristics found in the stone group tend to make the construction date go back in a way that gives priority to the characteristics found in the ground design.

研究分野：日本庭園史

キーワード：近世庭園 様式編年 重森三玲

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近世は、露地(茶庭)が成立すると共に、公家や大名による大規模な回遊式庭園が生まれ、日本庭園史上最も華やかな庭園文化が展開した時代である。近年は特に大名庭園や宮廷庭園について、その形態のみならず利用のあり方に注目する研究が多くなされている。

一方、近世には書院造庭園の範疇に入ると考えられる、寺院や邸宅にともなう中小規模の庭園も数多く造られた。庭園研究家の重森三玲・重森完途著『日本庭園史大系』1971-1976に掲載される、近世の庭園には、桃山時代の庭園 53 件、江戸時代の庭園 180 件の合計 233 件がある。そのうちの約 200 件が寺院をはじめとする中小規模の庭園であり、これらが近世庭園の大多数を占めることがわかる。

これらのような近世の中小規模の庭園は全国に展開し、国あるいは都道府県・市町村により名勝指定がなされているものもある。特に文化財数の少ない地域では、これらは地域の中心的な文化財として、重要な観光資源ともなっている。しかしながら、重森らの調査以降、学術的な研究が十分に蓄積されていない庭園も多く、いまだに不確かな伝承に基づく案内板が立てられているような場合がある。

現在の庭園史研究においては、現存する庭園が現在に至るまでの間に、様々な経年変化や改変を受けていることを前提に、庭園の様式編年のみで、庭園の造営年代を推定することを避け、建造物の建築年代や文書等の史料の記載、あるいは考古学的な発掘調査等に、学術的な根拠を求め、そのため、庭園史独自の視点からの様式編年研究は、上記の重森三玲が『日本庭園史大系』において年代順に庭園を提示して以降、個別事例の検討を除いて、通史的な観点での批判的研究が進展していない。

### 2. 研究の目的

上記背景を踏まえ、本研究では通史的・網羅的な編年研究として唯一である重森三玲の調査研究を対象に、重森の庭園史の通史的な理解および各庭園に関する造営年代評価等、重森の持つ様式編年観を分析し、その有効性を検証する。

### 3. 研究の方法

本研究では、重森三玲の著作、『日本庭園史図鑑』(有光社、1936-1939、以下『図鑑』と呼称)および『日本庭園史大系』(社会思想社、1971-1976、以下『大系』と呼称)の読解と分析、重森の著作に記載される庭園のリスト作成、重森の庭園の重森による評価の整理をおこない、重森による様式編年観を確認した。また、重森の編年観を批判的に検証するため、近世造園古書の読解を併せておこなった。

当初、桃山時代・江戸時代の中小規模庭園について地域を限って網羅的な現地調査をおこなうことを予定していたが、事情により現地調査の実施が困難となったことから、やむなく机上作業を中心とする方法をとった。

### 4. 研究成果

#### (1) 重森三玲の様式編年観の整理

『大系』によると、重森は、寛永元年(1624)から正徳5年(1715)までを江戸時代初期、享保元年(1716)から天明8年(1788)を江戸時代中期、寛政元年(1789)から慶応3年(1876)までを江戸時代末期と捉える。さらに江戸初期は、寛永から万治まで、寛文～延宝まで、元禄頃と3つの時期に区分する。

各庭園の造営年代を庭園様式に求める際の、各時期ごとの特徴について、『大系』の記載を抜粋、分析をおこなった。その結果、重森は、特に池の形状を中心とする地割や、三尊石組・滝石組・護岸石組等の石組について、各時期の「典型的」な特徴を挙げていることがわかった。植栽については、変化するものであるため時期の特徴はわからないとしつつ、刈込の在り方に特徴を捉えていた。また、枯山水については、江戸時代の枯山水の池庭に準じるものとした。一方、露地については茶人の好みが多様であるため年代鑑別は難しいとした。

以上の各時期にかかる特徴について、内容を列記すると、以下のようになる。

#### 【地割】

- 〔初期〕
  - ・ 諸大名が造営した大池庭に準じるように、池の規模が大きい。
  - ・ 築山が大きい。
  - ・ 蓬萊山水を主題とするものが多い。
  - ・ 寛永期～万治期：池は桃山期より浅く、幅広で中島が大きい。
  - ・ 寛文期～天和期：池が細長く、中島はない。
  - ・ 元禄期前後：池が円型に近い、亀島が大きい。
- 〔中期〕
  - ・ 座視観賞の度合いが強く一方向面化。

- ・池の規模が小さい。
- ・池の対岸が出島のように張り出し、天明期～寛政期に最も顕著。
- ・山畔を利用する。
- ・宝暦期以降、出島がより突出する。
- ・池の規模がますます小さく、細長い。

〔末期〕

【石組】

〔初期〕

- ・三尊石組の脇石が平面配置上、前方に離れた横石となる。
- ・寛永期まで：護岸石組は、桃山期からの豪壮な石組。
- ・寛文期以降：護岸石組に用いる石が小型になる。
- ・護岸石は、一段に組む場合が増え、草付とすることもある。
- ・船着石を用いる。
- ・滝石組は（竜門式に対して）自然式が多く、一段組が多い。
- ・飛石は、桃山期の終わりから寛永期まで、書院庭に打たれるようになる。
- ・三尊石組の中心石が立石、脇石の2石が横石（3石とも横石の場合もあり）。
- ・庭石材料として、小石を多数使用する。
- ・滝石組は低く、水分石を手前に大きく扱う。枯滝とする場合も多い。

〔中期〕

【植栽】

〔初期〕

- ・大刈込が発達。

〔中期〕

- ・築山に小刈込を多用。
- ・宝暦期以降：山畔の植栽が段刈式。

【石造物】

〔初期〕

- ・切石橋の反りがやや強くなる。

〔中期〕

- ・切石橋の反りが強く、定型的な橋が増える。

（2）個別事例の年代観の検証

『図鑑』および『大系』の個別解説の内容を読解し、造営年代推定の根拠について検討をおこなった。その結果、石組にみられる特徴が、地割にみられる特徴に優先するかたちで造営年代を遡らせる傾向にあるという仮説が得られた。

例えば、深田氏庭園（米子市）は、池の地割構成からすると、先にまとめた重森の編年観における、江戸時代中期の様相を示しているが、重森はこれを構成の改修であると考え、三尊石や亀島・鶴島の石組が、特徴的な姿形の巨石を用いた力強い石組であることを高く評価し、これを鎌倉時代の作とみる。また、興禅寺庭園（鳥取市）もまた、重森の編年観による江戸時代中期初頭の池の形状を取るが、巨石による鶴島石組の豪華さから、江戸時代初期と鑑別している。

このような傾向には、重森が庭園における巨石による石組の始源を上代の磐座・磐境に求めたこと、また鶴島石組の登場が、蓬萊思想が日本に入った古代に遡ると考えたことに関係があるとみられ、今後検証を進めていく課題があきらかとなった。

（3）近世造園古書の読解

重森は、江戸時代中期・末期の庭園を「甚だしく墮落し、傑出したものが出来なかった（『大系』26巻p.133）」と評価し、その要因に当時の作庭の定型化・類型化を進めた「実用庭園書」が出版されたことを挙げている。特に「築山庭造伝（後編）」に掲載の真・行・草の平庭の図示について、これがそのまま手本とされたかどうかはわからないが、江戸時代中期頃の普遍的な庭園の姿であると評価する（『大系』25巻p.135）。

そこで、本研究では「築山庭造伝」と江戸時代中期・末期の庭園との関係を考察するための基礎的な研究として、「築山庭造伝（前編・後編）」の画像のデジタル化と翻刻の作業をおこなった。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

高橋知奈津、近世造園書にみる「露地」・「茶庭」、平成30年度庭園の歴史に関する研究会報告書 茶の文化と庭園、査読なし、2019、pp.20-35

高橋知奈津、回遊式庭園の研究現況とその論点、平成29年度庭園の歴史に関する研究会報告書 回遊式庭園と庭園文化、査読なし、2018、pp.2-5

高橋知奈津、昭和庭園史研究の血潮、遺跡学研究第14号、査読なし、2017、p.46

高橋知奈津、戦国城館の庭園遺構、平成26年度庭園の歴史に関する研究会報告書 戦国時代の城館の庭園、査読なし、2015、p.2-11

〔学会発表〕(計1件)

高橋知奈津、奈良市における庭園の総合調査(速報)、日本庭園学会関西支部大会、2018.11.3

〔図書〕(計3件)

高橋知奈津・マレス・エマニュエル編『平成29年度庭園の歴史に関する研究会報告書 回遊

式庭園と庭園文化』2018、奈良文化財研究所  
高橋知奈津編『中世庭園の研究 鎌倉・室町時代』奈良文化財研究所学報第96冊・研究論  
集18、2016  
高橋知奈津編『平成26年度庭園の歴史に関する研究会報告書 戦国時代の城館の庭園』2015、  
奈良文化財研究所

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。